リレーエッセイ 15

家を開く準備を

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 主席研究員
加茂 みどり

看取(みと)りの場所が不足する―ショッキングな内容だ。2016年の日本の死亡者数は約130万人。2040年頃には約168万人となる。現在の死亡者は、74%が病院で、13%が自宅、7%が老人ホーム、6%が診療所・施設やその他の場所で亡くなっている。これから増える38万人が亡くなる場所はどこなのか。病床数も介護施設もそこまでは増えないとなると、看取りの場所がない。誰にも看取られず、自宅での孤独死が増えてしまう…ということになるのだろうか。65歳以上の単身高齢者は2015年で625・3万世帯、2040年には900万世帯に迫る。家がきちんと看取りの場所とならねばならない。

では、看取りの場所となる家とは、どんな家だろうか。少なくとも一人暮らしの高齢者が、在宅で介護や医療のサービスを受けられるのが必須だろう。そう考えた時、思い出すのは私の父の晩年である。父は体が弱く、最後は病院で亡くなったが、長く自宅で療養していた。思い返すと、実家に最も来訪者が多かったのは、私が物心ついて以来、父が療養していた時期ではないだろうか。母は入院しており、実家は父と私と弟の3人だった。私と弟は働いていたので、昼間は父が家に1人。行政にも相談し、使えるサービスを探して頼っていた。すると代わる代わる多くのサービス関係者の方が来られる。まず、相談先の行政の方が、定期的に様子を見に来られる。ヘルパーの方、そしてお弁当を届けてくださる方。複数のサービスを組み合わせて、なんとか父の一週間を繋いでいた。父の衰えが進行するということは、サービスの方に少しずつ家の奥まで入っていただくということだった。家を少しずつ開いていく過程でもあった。

「住み開き」という言葉は、能動的に自ら開くというニュアンスで使われるが、私の実感では、体が弱ってサービスを受けるようになると、必要に迫られ開かざるを得なくなる。しかし、同時にそれは、自宅でサービスを購入しながら、体が弱っても自立して暮らす、ということかもしれない。家は、開く準備をしていかねばならないのではないか。

世の中は「住み開き」―本来家族に閉じた家をソトに開き、交流や活動の場とする―がブームとなり、増えている。何やら楽しそうである。楽しいことから始めればよい。どんなきっかけや理由であっても、家を開いていくことが、「その時」の準備になる、と考えている。

かも・みどり
京都大学工学部建築学科卒業後、大阪ガス株式会社入社。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了。現在、大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 主席研究員。博士(工学)。一級建築士。大阪ガス実験集合住宅NEXT21において、住まい方調査やリフォーム実験などを担当、少子高齢社会に対応した住宅計画等について研究。神戸芸術工科大学、神戸松陰女子学院大学、大阪商業大学非常勤講師。